

東北集会 in 福島／農と地域の希望が芽吹く

谷口吉光（秋田県立大学）

「私は1ヘクタールの畑で40種類の無農薬野菜をひとりで育て、100軒のお客さんに週3回自分で車を運転して届けています」。

500人の聴衆で超満員の会場はどよめいた。壇上ではきもの姿の若い女性がにこやかに自分の農業実践について語っている。

「こんな若い娘が1ヘクタールの専業農家？」「40種類の野菜を1人でつくる？」「配達も自分で？」

彼女の実践は普通の農業の常識を軽々と超えている。だからベテラン農家も目を丸くして聞いている。

彼女の名前は須藤陽子さん。福島県出身でまだ28歳。大学（人文学部）で有機農業の魅力を知り、卒業後1年間の農家研修をへて、地元で50アールの畑を借りて無農薬野菜の栽培・販売を始めた。就農して4年目の昨年には畑の面積を2倍に増やしたという。

この集会は「農を変えたい！東北集会 in 福島」。有機農業を中心にして、東北農業の再生をめざす農家の集まりだ。06年1月の山形集会からスタートし、秋田県、岩手県とリレーして、今年は福島県にやってきた。毎回150～250人も集まって盛り上がるのだが、今回は500人を超える申込みがあったという。農業に対する人々のまなざしが変わったことを実感させられる。

それにしても会場のこの明るい雰囲気はどうだろう。先ほどから東北各県の若い農家の実践報告が始まっている。須藤さん以外はすべて男性だ。大学で哲学を勉強したAさんは有機農家の家に婿入りして有機農業を始めたというし、イタリアとフランスに9年間海外駐在したBさんは仕事に明け暮れる毎日がいやになって退社し、地元の会津に帰って養鶏を始める準備をしている。農林水産省の職員だったCさんは人事交流で過ごした福島県の山間地の暮らしが忘れられず、退職してその村で就農した。農家出身のDさんは祖父の死をきっかけに有機稲作を始めた。「最初の稲刈りが豊作で、思わずコンバインの上で『おじいちゃん、やったよ』と叫びました」というエピソードに会場は爆笑に包まれた。

こんなにさまざまな若者が農業に希望を抱いて東北各地で就農している。その苦労話のひとつひとつに「わかるわかる」「オレもそうだった」と頷きながら聞いている先輩農家たち。なかには須藤さんのように先輩の度肝を抜く人もいる。

農業の思いや技は農家から農家へ伝えられていく。苦労するのは当たり前。豊作不作も当たり前。金はなかなかたまらない。でも農業はいい。よくできた時の喜び。食べる人に「おいしい」といってもらった時の喜び。自分で食べるものを自分で作れる喜び。

そんな農家たちの幸せな気分が会場に充満し、私もそれを胸一杯吸って元気になった。テレビや新聞は不況の暗いニュース一色だが、雪の下に芽を出す山野草のように、新しい農業と地域の希望が東北で芽吹いていることを知ってほしい。

（朝日新聞「あきた時評」 2009年1月28日掲載分を加筆・修正した）